

池内遺跡の発掘調査



2006年1月21日



(財) 大阪府文化財センター

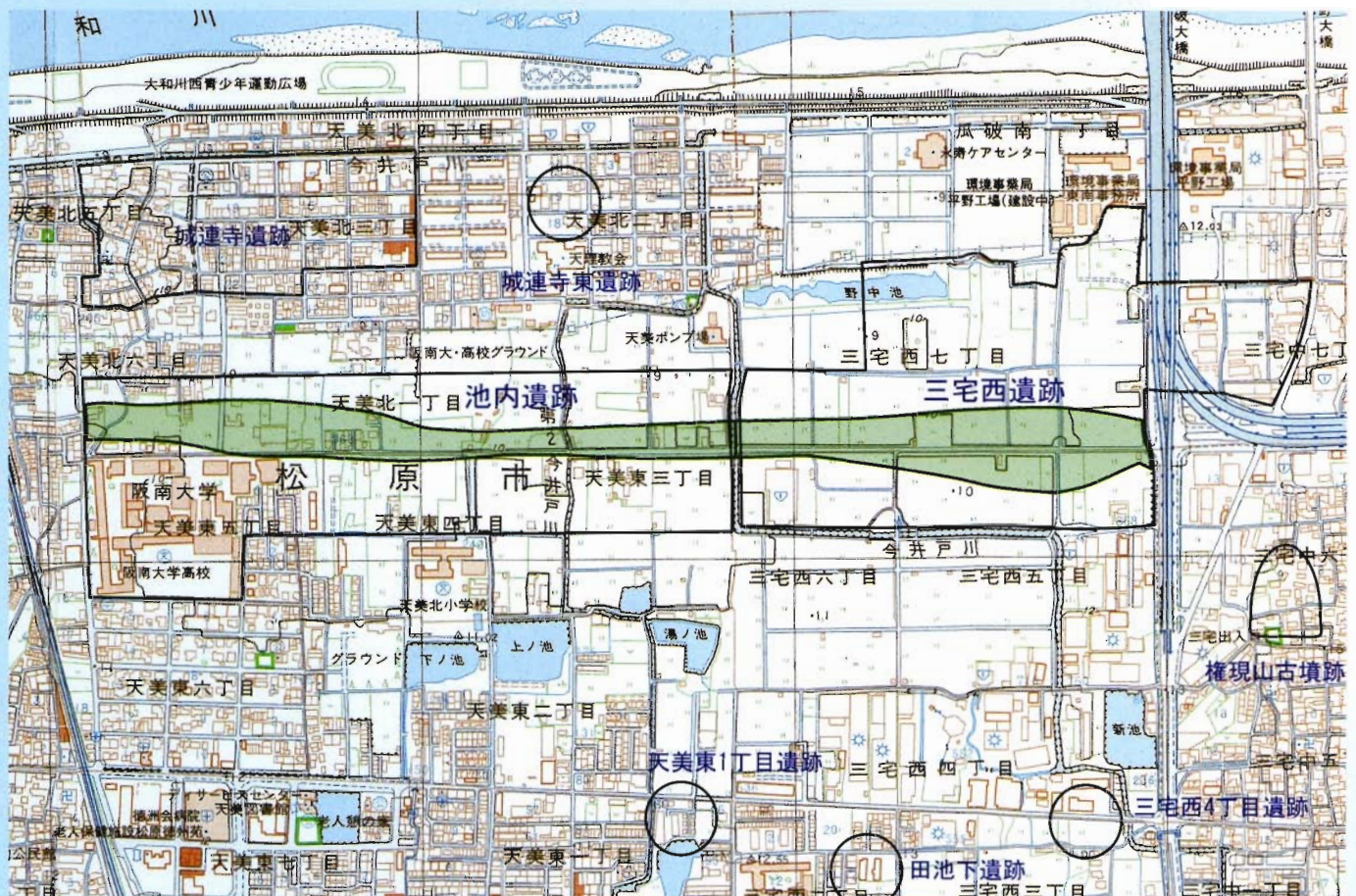
調査地の位置 と調査の目的

今回の調査は、都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線（一般府道住吉八尾線）建設に伴うものです。平成15年度から16年度にかけて、事前に路線予定地内において埋蔵文化財の確認調査をおこないました。その結果、遺物や遺構などがみつかったため、路線予定地の東部を三宅西遺跡、その西側を池内遺跡の範囲に含めることとし、調査をおこなうことになりました。三宅西遺跡は平成16年度から、池内遺跡は17年度から発掘調査を開始しています。

三宅西遺跡と池内遺跡は、ともに弥生時代～中世の集落跡として知られています。この他に、周辺では、城連寺東遺跡（古墳時代～中世の集落跡）・城連寺遺跡（弥生時代～中世の集落跡・社寺跡）・天美西遺跡（弥生時代～中世の集落跡）・大和川今池遺跡（旧石器時代～中世の集落跡・城館跡・社寺跡）などの遺跡が知られています。中でも、近鉄南大阪線の西側に広がる大和川今池遺跡では、今までに、下水処理場建設に伴う調査や大和川河川敷での調査がおこなわれており、多くの成果があげられています。さらに三宅西遺跡の北側には、弥生時代の遺跡として知られる瓜破遺跡が広がっており、集落跡や墓域が確認されています。

地理的に見ると、調査区周辺には、三宅西遺跡や大和川今池遺跡などの段丘上に広がる遺跡が多く分布しており、条里地割も比較的明瞭に残されています。

調査区周辺では、現在までに調査があまりおこなわれていないことから、各遺跡の範囲や時期などの詳細は、まだはっきりしていません。池内遺跡や三宅西遺跡をはじめとする今回の調査は、遺跡範囲を東西方向に横断するかたちで進められることから、これらを解明する成果が期待されるということです。



周辺の遺跡および調査区位置図（1/10,000）

池内遺跡の 調査

東側を(その1)調査区、西側を(その2)調査区として調査中です。調査は始まったばかりですが、(その2)調査区を中心に、平安時代(10～11世紀)の屋敷跡や屋敷境の道路などの貴重な発見がありました。

屋敷跡 調査地の西側では、多くの柱穴が集中して見つかりました。底あるいは縁をもつ大規模な東西方向の建物を中心として、この建物と整然と柱筋を揃えた建物が配置されています。柱跡には重なりあうものもあるため、何度か建て替えられたことがわかり、屋敷地の中で重要な建物であったと考えられます。屋敷地内の建物からやや離れた位置で、井戸・土坑などもみつかっています。

屋敷境 両側に溝を備えた南北方向の畦状の高まりがみつかり、道路として使用されていたと考えられます。屋敷地側の溝からは、土師器・黒色土器(表面を緻密にするために炭素を吸着させて、黒色にした土器)などの多くの遺物が出土しました。また、遺構の分布や現存する条里地割から、調査地の南側に現在ある東西方向の道路付近が屋敷の南境であったと推定できます。

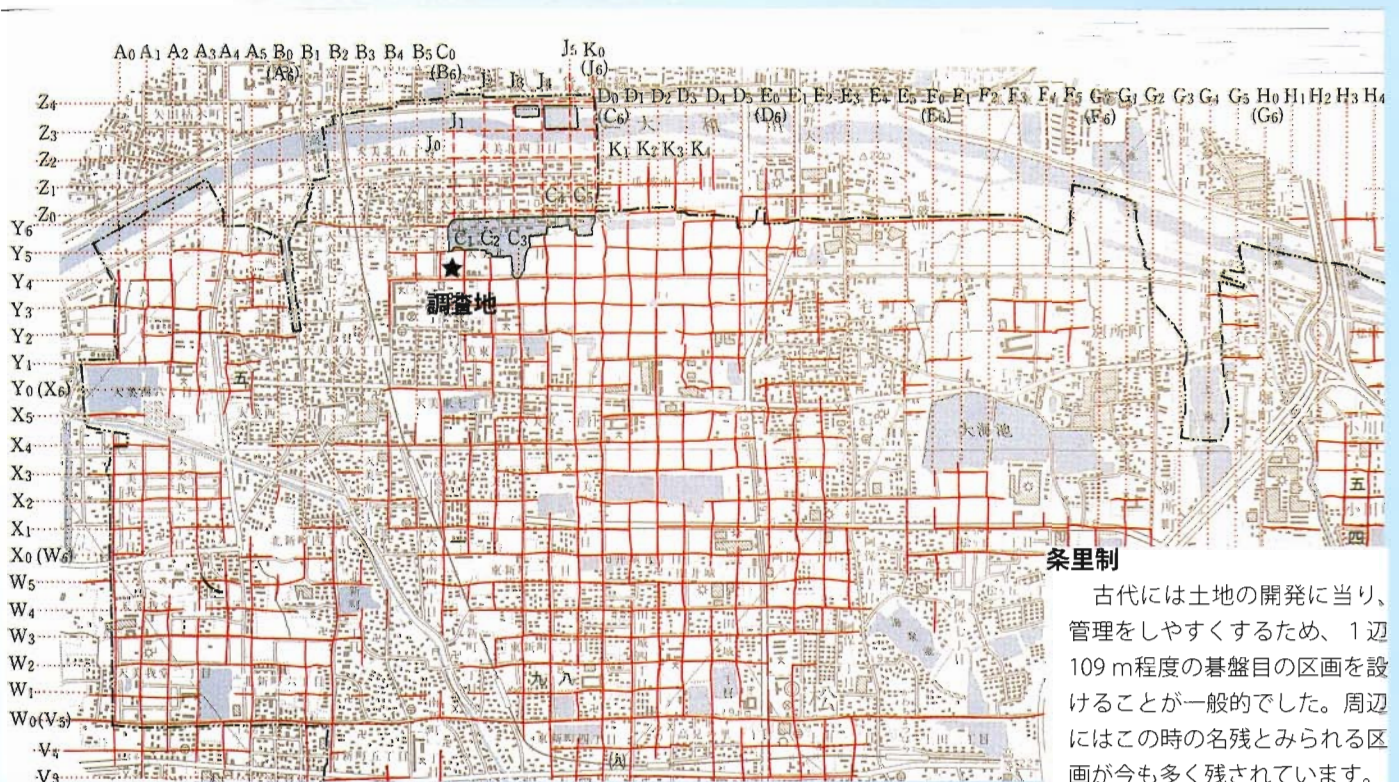
耕作域 屋敷境から東では小溝群がみつかり、耕作域であったようです。掘立柱建物もありますが、屋敷地の建物と比べ、規模も柱も小さいものです。小型の建物は(その1)でもみつかっています。

住人の性格 建物の規模はきわめて大きいのですが、出土遺物は、日常的な雑器がほとんどです。周囲には広大な耕作域があり、この地の開発・管理にあたった有力層であったと思われます。

条里制との関わり 今回みつかった区画は、条里制にのっとったものといえるでしょう。また、現在でも周辺では碁盤目状の区画が残っており、みつかった区画と合致しています。現存する区画が少なくとも平安時代にまで遡ることがわかりました。



池内遺跡(その1)の掘立柱建物



周辺に残る条里地割と調査地 (『松原市史』第一巻 足利健亮氏原図より改変)

池内遺跡

平安時代のおもな調査成果

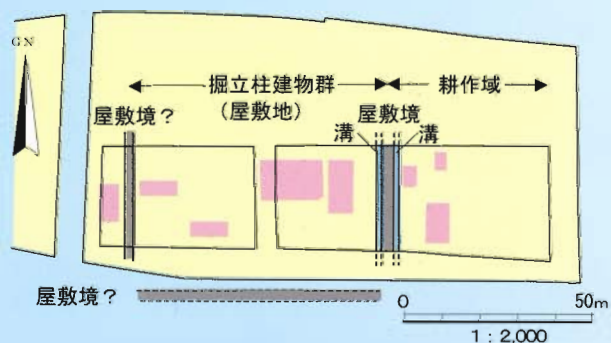
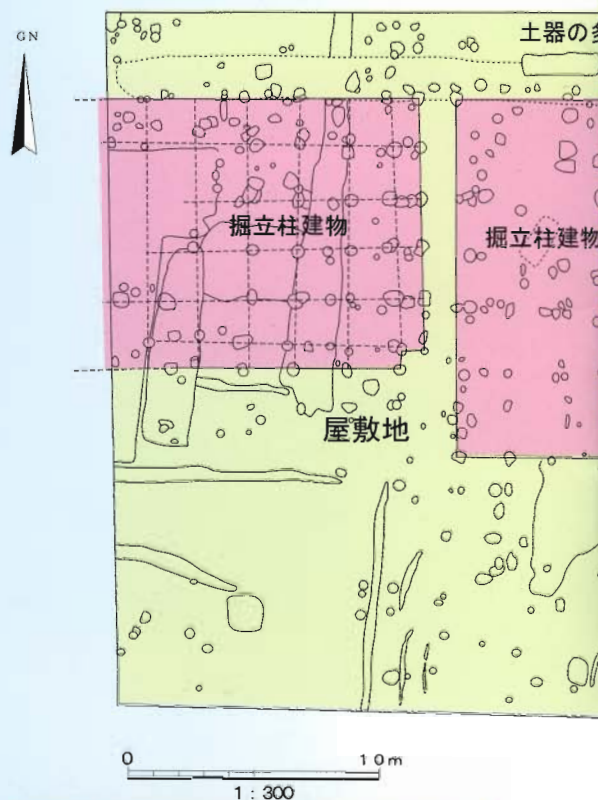
屋敷地内の掘立柱建物群（北から）

調査地の北西部では柱穴が密集してみつかり、掘立柱建物群があったことがわかりました。柱穴の組み合わせについては検討中ですが、東西方向の大規模な建物や、これに並ぶ南北方向の建物があったと考えられます。東西3間（約6m）、南北7間（約14m）の南北方向の掘立柱建物です。これより東には柱穴がないことから、屋敷地の東端の建物といえます。



屋敷地内の掘立柱建物（南から）

東西方向の建物は東と南に庇（ひ）あるいは縁（えり）が付き、南北約11m、東西12.5m以上もあり、屋敷地の中心的な建物と考えられます。



平安時代の土地利用のようす

屋敷境を隔てて、西は屋敷地、東は耕作域としておもに利用されています。遺構の分布から調査地南にある現在の東西方向の道路付近に屋敷地の南境があったと考えられます。また、西側の調査地でも、同様の畦（わ）状の高まりがみつかり、屋敷地の西境の可能性もあります。

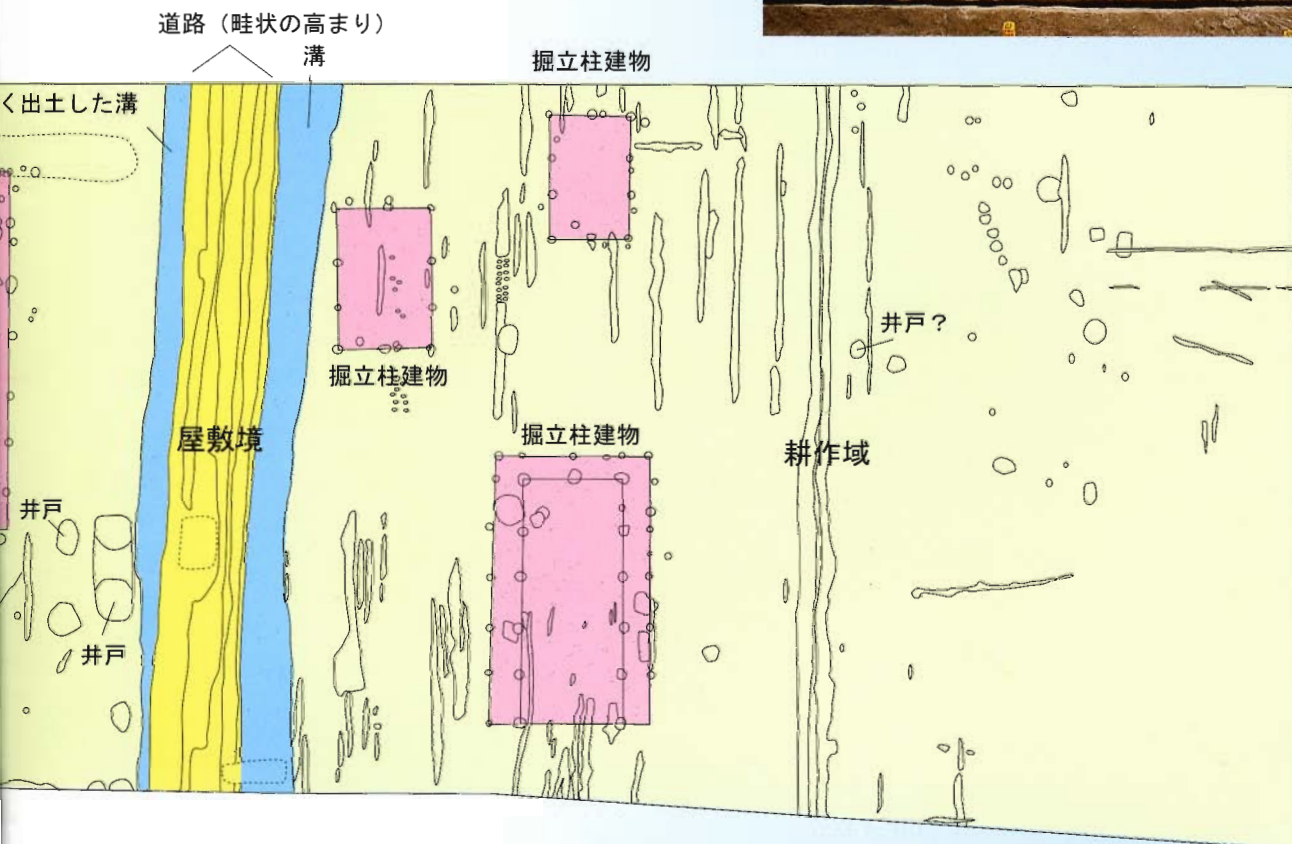


耕作域でみつかった耕作溝と掘立柱建物(北から)

屋敷境より東は耕作域として使用され、耕作に伴う小溝が多くみつかりました(縦の筋状に見えるもの)。畝の畝間溝^{うねま}と推定できるものもあります。

また、耕作域に当たる場所からも掘立柱建物がみつかっています(人のいるところ)。屋敷地の建物と比べると散在しており、建物の規模も、柱穴の大きさも小さいことが特徴です。

屋敷地の建物群より早く使われなくなった可能性もあります。



左 屋敷境の道路と溝(南から)

屋敷地の東の境として、両側に溝を伴う南北方向の道路がみつかりました。道路は、幅約1.8mで高さは0.3mあり、畦状に周囲より一段高くなっています。これより西側(写真左手)が屋敷地、東側(写真右手)が耕作域となっています。

この道路は周囲に残る条里型区画を2分する位置に当たっています。

また、屋敷地側に掘られた溝(写真左手)は南で狭く、北では広がっています。この幅の変わる部分は、入口のひとつであったのかもしれませんが。

右 土器が多く出土した溝(南西から)

屋敷境の溝からは土師器・黒色土器など多量の土器が出土しました。碗・皿など日常的な食器が多くを占めています。また、完全な形のものも多く、祭事などに伴って一度きりの使用で捨てられた可能性が考えられます。



三宅西遺跡 の調査

池内遺跡の東側に広がる三宅西遺跡では、現在までに、予定面積の約半分の調査が終了しています。ほぼ全面にわたって、調査区を横断する南北方向の自然流路が、何本も位置を変えながら流れており、常に水の流れにさらされていた様子うかがわれます。ただ、やや地形的に高い位置から、主に古墳時代と弥生時代を中心とする建物跡や遺物などが検出されています。ここで、現在までの調査成果を簡単にまとめておきます。

古墳時代では、調査区西端で、南東から北西に向かって流れる自然流路が検出され、中期頃の土器が多く出土しました。遺物の中には、須恵器のほかに朝鮮半島から持ち込まれた可能性の高い土器などがみられます。流路内では、木杭を人為的に組み合わせた井堰^{いぜき}がみつかりました。流路を横切るかたちで構築されており、水利目的の施設と考えることができます。また、調査区の中央部南側では、ほぼ同時期の柱穴群が検出されており、集落が営まれていたことがわかります。

弥生時代では、調査区東側で、中期前半の集落跡と方形や円形の周溝墓群がみつかりました。集落は、竪穴住居や掘立柱建物で構成されているほか、ごみ穴なども検出されています。建物が少ないため、集落の全体像ははっきりしませんが、竪穴住居からは土器とともに、サヌカイトの石材が



左上 自然流路 [1区]

中央部がやや広がっており、この部分に井堰がつくられています。

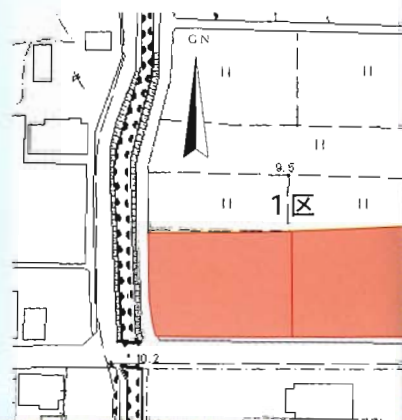
左下 井堰 [1区]

中央部で3ヶ所、北端部で1ヶ所確認されています。

下 ピット（柱穴群）

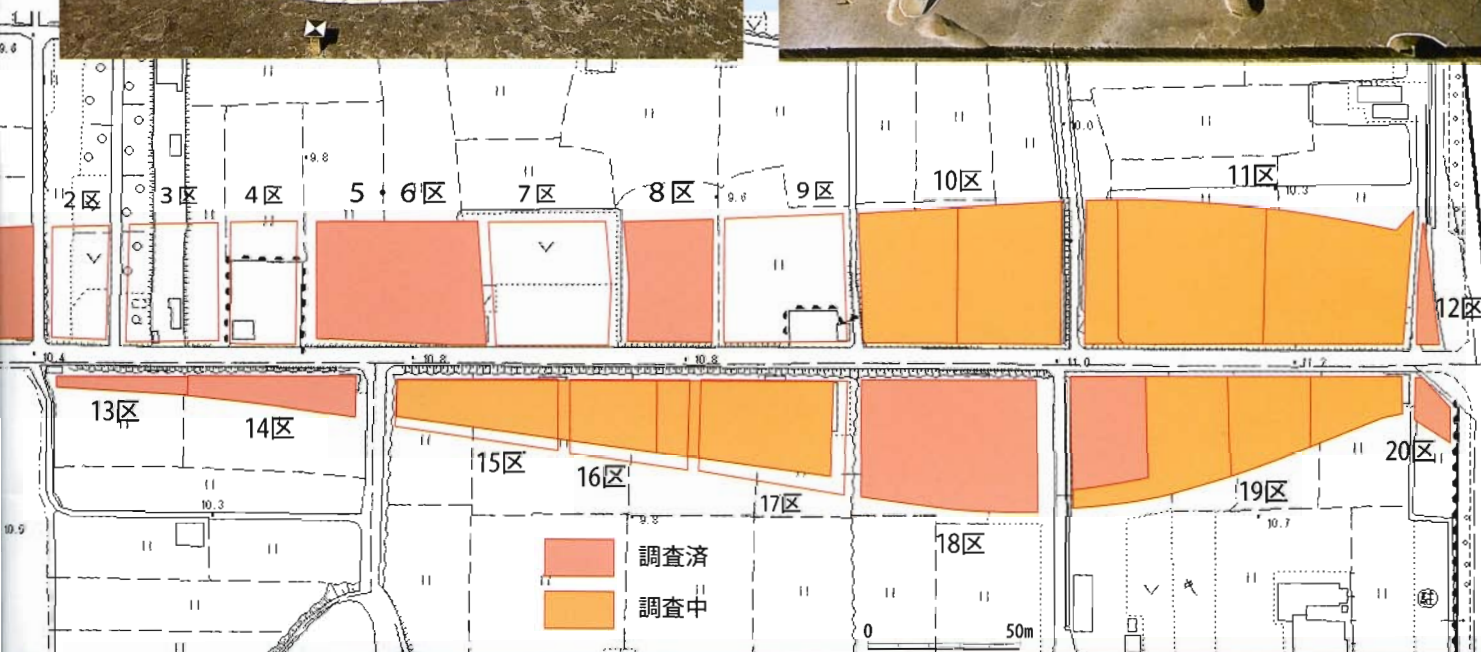
[13・14区]

狭い範囲ですが、密集して検出されています。



多く出土しており、石器の製作に関わるものとして注目されます。周溝墓群は、建物群からやや離れた調査区南端部で検出されました。上部はかなり削平されており、完全なかたちではありませんが、4基確認することができました。居住域と墓域が一体となった集落を想定することができます。

全体に、上層の古代・中世以降の生活面は、後世の耕作に伴う整地などにより失われているものと考えられ、遺物も含めてほとんどみつかりません。現在のところ、三宅西遺跡では、今回の池内遺跡で検出されたような建物群は、検出されていません。



上左 竪穴住居 [10区]

円形のもので、2回程度建て替えられたものと考えられます。

上右 掘立柱建物とごみ穴 [19区]

ごみ穴からは、土器やサヌカイトなどが多く出土しています。

右 周溝墓群 [18区]

中央に大型の方形のもの、その後方には円形のがみられます。調査区外に広がることが予想されます。



出土遺物と 今後の展望

まだ、調査途中であるため、はっきりしたことは言えませんが、池内遺跡と三宅西遺跡で出土した遺物の中で、特徴的なものを簡単に紹介しておきたいと思います。

三宅西遺跡で、縄文時代後期初頭（約4000年前）の縄文土器が、自然流路の底部からまとまって出土しています。多くの土器とともに、石器の材料となるサヌカイトもみつかり、近くに集落などが営まれていた可能性があります。この時期の土器の、近畿地方での出土例は多くなく、大変貴重な成果と言えます。

三宅西遺跡東端部では、多くの弥生時代中期前半（約2000年前）の弥生土器が出土しています。竪穴住居からは、サヌカイトの石材が多く出土しており、石器を製作していた可能性が考えられます。調査区西端部では、古墳時代の遺物が多く出土しています。その中に、「韓式土器」や「百濟土器」などが見られることから、渡来系の人々がこの地域に居住していたことも考えられます。

一方、池内遺跡では、調査が始まって間もないことから、古い時期のことはわかりませんが、今回検出された建物群や、調査区の東側でも平安時代を中心とした時期（約1100年前）の遺物が出土しています。前にも述べたように、建物群の東側を南北方向に走る溝からは、黒色土器碗を主体とする多量の土器が捨てられた状態でみつかり、この地域でこれほど多量の黒色土器が出土したことはなく、大変貴重な資料となります。

以上のように、全体に調査途中であるため、確定的なことはわかりませんが、三宅西遺跡では、



弥生土器出土状況 [三宅西遺跡 19区]



溝内土器出土状況 [池内遺跡 (その2)]

縄文時代から弥生時代、古墳時代にわたっての成果が判明しつつあります。今後は、古墳時代の集落などがみつかることが期待されます。池内遺跡でも、調査が進むと、今回の建物群の広がりだけではなく、三宅西遺跡と同様に、平安時代以前の古墳時代や弥生時代の成果が挙がることが期待されます。